

2022・9・22 【俳壇賞2022】 捨句 選30句

12行3段組14ポ 2022年9月22日 23:26 へ1 桐10

温泉の町のネオンゲートや春の宵

鳴く虫の壊れて土へ蟻の巢へ

紅白に黄金に黒に食積や

色白に生れて春の雫をかぶ

緑黄色野菜摂るべし南瓜食ふ

掃初の電気掃除機けたたまし

山吹の一盞余り縦に咲かせ

音もなく氷るものあり闇の中

会釈する大きな頭初髪の

会議室一人で使ふ涼しさよ

校庭の氷は銀に砕かれて

初髪の大きな頭ちかづき来

夏果の青空に見し雲と月

懐に後生大事の紙懐炉

初写真一家の少し入れ代り

縁側を素足すしく歩くなり

金槐を名告る和歌集実朝忌

書初の香に包まれて読始

帽子また小さくなりし夏休

蜜柑まだ剥けぬ幼なと思ひしが

長き夜の机に落る髪の影響

蜜柑まだ剥けぬ幼なの指にほふ

秋風に虫の骸の欠片かな

小正月小豆粥とや仮名ふりぬ

懐に小判たんまり星祭

大年の闇ふかぶかかと白鳥座

鳴く虫の鳴かぬは蟻の巢の中へ

筆先の文字となりゆく試筆かな

虫籠の鳴かず跳ばずとなりけり

雪の字の雷の字に似てお書初

書初めの雨 雪と雷の  
書初めはね 22

2

色白に生れて浮ぶ春の雲

子曰く子ら朗々と詠始

白髪の長身瘦軀初夏の街

初髪の大きな頭ちかづき来

餌を得し一番端の燕の子

初髪の大きな頭飾りゆれ

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

鳴く虫の鳴かなくなれば壊れけり

秋深き青空に見し雲と月

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

大年の闇の高きに白鳥座

初鏡一寸眼鏡を外し見る

帰り道いそいそ急ぐ福袋

書初の雨、雪、雷と書き連ね

書初の香に包まれて詠始

とびく

AAわけり  
倒れけり  
提倒し

夏衣をくさうにけり  
夏衣にさうにけり

一人大と書き連ね  
人犬

3

色白に生れて浮ぶ春の雲

初鏡一寸眼鏡を外し見る

長身の白髪紳士初夏を行く

書初の一、人、大と書き進む

餌を得し一番端の燕の子

書初の香に包まれて読始

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

子曰く、子ら朗々と読始

鳴く虫の鳴かなくなれば横倒し

山赤く燃え尽きて炭灰になる

秋深き青空に見し雲と月

狼藉や松の内なる寒の入

小春日の既に一句を得し思ひ

霰にも雪にもならず降り続く

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

洋裁も和裁も廃れ水仙花

短日の日々どんどんとずんずんと

洋裁も和裁も廃れ水仙花

余すところ数ふるところ年の暮

洋裁も和裁も廃れ水仙花

ゆうゆうと空を行くもの大晦日

洋裁も和裁も廃れ水仙花

大年の闇の高きにオリオン座

洋裁も和裁も廃れ水仙花

髪白く丈夫な人  
初夏と行く

本朝少きえしを  
のねに  
車輪其地

短日の日々  
まはる  
追はれゆく  
とんとんと  
のねに

4

色白は生れ付きなる春の雲

狼藉や松の内なる寒の入

丈高く髪白き人初夏を行く

霰にも雪にもならず降り続く

夕焼に車両乏しき車両基地

洋裁も和裁も廃れ水仙花

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

鳴く虫の鳴かなくなれば横倒し

行く秋の青空に見し雲と月

小春日の既に一句を得し思ひ

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

短日の日々とんと来ては去る

初鏡一寸眼鏡を外し見る

書初の一、人、大と書き進む

山赤く燃え尽きて炭灰になる

初夏を行く白髪頭を忘れぬや  
に覚えあう  
の温女二人  
りかてんう

書初の一、人、大と書き進む  
あつかいとき

やしてきては去る

色白は生れ付きなる春の雲 洋裁も和裁も廃れ水仙花

初夏を行く白髪頭の婆二人

夕焼に車両乏しき車両基地

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

鳴く虫の鳴かなくなれば横倒し

行く秋の青空に見し雲と月

小春日の既に一句を得し思ひ

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

短日がどどんやつて来ては去る

初鏡一寸眼鏡を外し見る

山赤く燃え尽きて炭灰になる

狼藉や松の内なる寒の入

6

色白は生れ付きなる春の雲 狼藉や松の内なる寒の入

初夏を行く白髪頭の婆二人 紙懷炉揉み手の中に暖かし

夕焼に車両乏しき車両基地 山赤く燃え尽きて炭灰になる

巻き上げて秋の簾の埃みゆ 洋裁も和裁も磨れ水仙花

鳴く虫の鳴かなくなれば横倒し

行く秋の青空に見し雲と月

小春日の既に一句を得し思ひ

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

短日がどんどんやつて来ては去る

余すところ数ふるところ年の暮

初鏡一寸眼鏡を外し見る

書初の香に包まれて詠始

まじまじと見ると  
 さこそこそ  
 日みてもが左

はほみむこもなかりけり  
 なしてせす

匠より靴きこもなく  
 かんこもあー

色白は生れ付きなり春の雲 書初の香に包まれて読始

縁側をすたすた歩く帰省かな 狼藉や松の内なる寒の入

夕焼に車両<sup>た</sup>乏しき車両基地 紙懷炉揉み手の中に暖かし

巻き上げて秋の簾の埃みゆ 山赤く燃え尽きて炭灰になる

鳴く虫の鳴かなくなれば横倒し 洋裁も和裁も廃れ水仙花

行く秋の青空に見し雲と月

小春日の既に一句を得し思ひ

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

短日がどんでん~~や~~<sup>いとまろ</sup>来ては去る

きらきらを吊るす聖樹の緑色

余すところ数ふるところ年の暮

初鏡ほほむむこともなしとせず

自転本に乗せられて行く春の暮

2022・9・25【俳壇賞2022B 全124句】 選39句<sup>25</sup>

8

色白は生れ付きなり春の雲

に生れ付て云へ

小春日の既に一句を得し思ひ

毛氈はおひさまの色おひなさま

冬ざれに着る丸首のトレーナー

縁側をすたすた歩く帰省かな

冬ざれに枯草色の輪ゴムかな

枯草と同じ色な輪ゴムかな

夕焼に車両乏しき車両基地

岩ひとつつ祀る枯野でありにけり

庭先に母と火遊び夏休

枯野行く柴犬の尻真つ白な

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

きらきらを吊るす聖樹の緑色

鳴く虫の鳴かなくなれば横倒し

余すところ数ふるところ年の暮

自転車の後ろに乗せて秋の暮

初鏡ほほゑむこともなしとせず

銀山のいくつ崩れて天の川

書初の香に包まれて読始

行く秋の青空に見し雲と月

狼藉や松の内なる寒の入

10行3段組14ポ 2022年9月25日 18:54 ↑ 桐10

お開きの句屑を燃やす暖炉かな

紙懐炉揉み手の中に暖かし

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

山赤く燃え尽きて炭灰になる

洋裁も和裁も廃れ水仙花

初句を云へる句屑を  
手に扱す

銀山

苔むかへに乗せて

書初

句屑

赤子



色白の春の  
軽りと春の

色白に生れて空へ春の雲

小春日の既に一句を得し思ひ

狼藉や松の内なる寒の入

毛氈はおひさまの色おひなさま

冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

紙懐炉揉み手の中に暖かし

縁側をすたすた歩く帰省かな

岩ひとつ祀る枯野を通り過ぎ

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

夕焼に閑散たるや車両基地

枯野行く柴犬の尻真つ白な

山赤く燃え尽きて炭灰になる

庭先に母と火遊び夏休

枯草と同じ色なるゴムバンド

洋裁も和裁も廃れ水仙花

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

きらきらを吊す聖樹の緑色

鳴く虫の鳴かなくなれば横倒し

余すところ数ふるところ年の暮

自転車に乗せられて行く秋の暮

初鏡ほほゑむことのなしとせず

銀の山のいくつ崩れて天の川

書初の香に包まれて詠始む

行く秋の青空に見し雲と月

初句会終へし句屑を暖炉へと

めろめろと暖炉に燃やした句屑かな

10

句舎の屑

色白の身を軽々と春の雲 冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

毛氈はおひさまの色おひなさま 枯野行く柴犬の尻真つ白な

縁側をすたすた歩く帰省かな 岩ひとつ祀る枯野を通り過ぎ

夕焼に閑散たるや車両基地 枯草と同じ色なるゴムバンド

庭先に母と火遊び夏休 きらきらを吊す聖樹の緑色

巻き上げて秋の簾の埃みゆ 余すところ数ふるところ年の暮

自転車に乗せられて行く秋の暮 初鏡ほほゑむことのなしとせず

銀の山のいくつ崩れて天の川 書初の香に包まれて読始む

行く秋の青空に見し雲と月 狼藉や松の内なる寒の入

小春日の既に一句を得し思ひ 蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

紙懐炉揉み手の中に暖かし

投じたる句屑の炎ゆる暖炉かな

山赤く燃え尽きて炭灰になる

洋裁も和裁も廃れ水仙花

句舎の屑  
山赤く燃え尽きて炭灰になる  
洋裁も和裁も廃れ水仙花

2022・9・26【俳壇賞2022B】全175句

選25句

目壇x=159

色白の身を軽々と春の雲

毛氈はおひさまの色おひなさま

縁側をすたすた歩く帰省かな

素麺の食後に贅を尽したる

夕焼に閑散たるや車輛基地

庭先に母と火遊び夏休

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

自転車に乗せられて帰る秋の暮

銀の山のいくつ崩れて天の川

行く秋の青空に見し雲と月

小春日の既に一句を得し思ひ

冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

枯野行く柴犬の尻真つ白な

岩ひとつ松一本を枯野かな

枯草と同じ色して輪ゴムかな

きらきらを吊す聖樹の緑色

余すところ数ふるところ年の暮

初鏡ほほゑむことのなしとせず

書初の香に包まれて読始む

狼藉や松の内なる寒の入

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

紙懐炉揉み手の中に暖かし

投じたる句会の屑や暖炉燃ゆ

山赤く燃えくづほれて炭は灰

洋裁も和裁も廃れ水仙花

12行3段組14ポ 2022年9月26日 18:39 ^1 桐10

自転車の後部と秋の暮

自転車の後部に乗せられて  
秋の暮  
岩ひとつ松一本を枯野かな  
きらきらを吊す聖樹の緑色  
余すところ数ふるところ年の暮  
初鏡ほほゑむことのなしとせず  
書初の香に包まれて読始む  
狼藉や松の内なる寒の入  
蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ  
紙懐炉揉み手の中に暖かし  
投じたる句会の屑や暖炉燃ゆ  
山赤く燃えくづほれて炭は灰

12

25

色白の身を軽々と春の雲

冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

洋裁も和裁も廃れ水仙花

毛氈はお日さまの色おひなさま

岩ひとつ松一本を枯野かな

~~のスイマーさん~~

ゆつくりと噴水のごと芽吹きたる

枯草と同じ色して輪ゴムかな

~~吐水と極ゆるくと~~

縁側をすたすた歩く帰省かな

きらきらを吊す聖樹の緑色

素麺の食後に贅を尽したる

余すところ数ふるところ年の暮

夕焼に閑散たるや車輛基地

初鏡ほほむむことのなしとせず

庭先に母と火遊び夏休

書初の香に包まれて読始む

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

狼藉や松の内なる寒の入

自転車の父が行きけり秋の暮

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

~~の寝字を~~

銀の山のいくつ崩れて天の川

紙懐炉揉み手の中に暖かし

行く秋の青空に見し雲と月

投げ入れし句会の屑や暖炉燃ゆ

小春日の既に一句を得し思ひ

山赤く燃えくづほれて炭は灰

~~自転車が子をおおひやと~~

秋の暮

~~およはれて母の自転車~~

秋の暮

~~およはれて自転車を~~

春の暮

自転車の故

13

色白の身を軽々と春の雲 岩ひとつ松一本を枯野かな

毛氈はお日さまの色おひなさま 枯草と同じ色して輪ゴムかな

噴水のスローモーション芽吹かな きらきらを吊す聖樹の緑色

縁側をすたすた歩く帰省かな おぶはれて母の自転車暮早し

素麺の食後に贅を尽したる 余すところ数ふるところ年の暮

夕焼に閑散たるや車輛基地 初鏡わがほほゑみのなしとせず

庭先に母と火遊び夏休 書初の香に包まれて読始む

巻き上げて秋の簾の埃みゆ 狼藉や松の内なる寒の入

銀の山のいくつ崩れて天の川 蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

行く秋の青空に見し雲と月 紙懐炉揉み手の中に暖かし

小春日の既に一句を得し思ひ 投げ入れし句会の屑や暖炉燃ゆ

冬ざれに買ふ丸首のトレーナー 山赤く燃えくづほれて炭は灰

洋裁も和裁も廃れ水仙花

この先に [あま] [な] [の] 総年の鏡

秋の老 <sup>Coq</sup> 子金句 老うかばー

七歳で拾得り落す冬瓜かな

引き当てし [お] [ま] [の] [の] 世帯の鏡

甘藷かな

もろこしと衣作せて [あ] [ま] [の] 全相と文子 <sup>めこ</sup> <sup>めこ</sup> <sup>めこ</sup> 牛乳の象

冬も衣

14

色白の身を軽々と春の雲

その先にありやなしやの穂草の穂

~~猫~~しかと膝に抱き止め歌留多会

毛氈はお日さまの色おひなさま

~~行~~く秋の青空に見し雲と月

初旅の浜辺に拾ふ桜貝

噴水のスロ―モ―ション芽吹かな

小春日の既に一句を得し思ひ

狼藉や松の内なる寒の入

縁側をすたすた歩く帰省かな

冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

素麺の食後に贅を尽したる

岩ひとつ松一本を枯野かな

紙懐炉揉み手の中に暖かし

夕焼に閑散たるや車輛基地

枯草と同じ色して輪ゴムかな

投げ入れし句会の屑や暖炉燃ゆ

庭先に母と火遊び夏休

きらきらを吊す聖樹の緑色

山赤く燃えくづほれて炭は灰

銀の山のいくつ崩れて天の川

おぶはれて母の自転車暮早し

洋裁も和裁も廃れ水仙花

~~い~~ざ引かん芋蔓式の豊の秋

余すところ数ふるところ年の暮

桃色は桃の実のいろ甘さうな

初鏡わがほほゑみのなしとせず

巻き上げて秋の簾の埃みゆ

胎の子に初湯加減を聞く夜かな

日本に餡子の幸や新小豆

書初の香に包まれて読始む

15

色白の身を軽々と春の雲 小春日の既に一句を得し思ひ

毛氈はお日さまの色おひなさま 冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

出かかりし噴水のごと芽吹かな そとよ 岩ひとつ松一本を枯野かな

縁側をすたすた歩く帰省かな 枯草と同じ色して輪ゴムかな の梅

素麺の食後に贅を尽したる きらきらを吊す聖樹の緑色

夕焼に閑散たるや車輛基地 おぶはれて母の自転車暮早し

庭先に母と火遊び夏休 余すところ数ふるところ年の暮

銀の山のいくつ崩れて天の川 初鏡わがほほゑみのなしとせず

桃色は桃の実のいろ甘さうな 胎の子に初湯加減を聞く夜かな

巻き上げて秋の簾の埃みゆ 書初の香に包まれて読始む

日本に餡子の幸や新小豆 初旅の浜辺に拾ふ桜貝

その先にありやなしやの穂草の穂 狼藉や松の内なる寒の入

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

紙懐炉揉み手の中に暖かし

投げ入れし句会の屑や暖炉燃ゆ

山赤く燃えくづほれて炭は灰

洋裁も和裁も廃れ水仙花

画用紙の正しくと白しうすエに画用

16

見ま  
この俳壇  
重治全

色白の身を軽々と春の雲 小春日の既に一句を得し思ひ

毛氈はお日さまの色おひなさま 冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

出かかりし噴水のごと芽吹きたる 画用紙のざらりと白し富士に雪

縁側をすたすた歩く帰省かな 岩ひとつ松一本を枯野かな

素麺の食後に贅を尽したる 枯草と同じ色して輪ゴムの輪

夕焼に閑散たるや車輛基地 おぶはれて母の自転車暮早し

庭先に母と火遊び夏休 きらきらを吊す聖樹の緑色

銀の山いくつ崩れて天の川 余すところ数ふるところ年の暮

桃色は桃の実のいろ甘さうな 初鏡わがほほゑみのなしとせず

巻き上げて秋の簾の埃みゆ 胎の子に初湯加減を聞く夜かな

日本に餡子の幸や新小豆 書初の香に包まれて読始む

その先にありやなしやの穂草の穂 初旅の浜辺に拾ふ桜貝

狼藉や松の内なる寒の入

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

紙懐炉揉み手の中に暖かし

投げ入れし句会の屑や暖炉燃ゆ

山赤く燃えくづほれて炭は灰

洋裁も和裁も廃れ水仙花

之粒のを瓜タワシの粒をかる

香白鼠の

由工木の本草哉といふ言葉

月まわ菊の白さに正油張

本帳や鳥の顔となる木す掃



17

夜元抱飯

色白の身を軽々と春の雲 にこそやはらふ その先にありやなしやの穂草の穂

毛氈はお日さまの色おひなさま 軽く昇る 小春日の既に一句を得し思ひ

~~出~~かかりし噴水のごと芽吹きたる 冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

縁側をすたすた歩く帰省かな 画用紙のざらりと白し富士に雪 タイトルに

素麺の食後に贅を尽したる 岩ひとつ松一本を枯野かな

夕焼に閑散たるや車輛基地 枯草と同じ色して輪ゴムの輪

庭先に母と火遊び夏休 おぶはれて自転車早し暮早し

~~巻~~き上げて秋の簾の埃みゆ 関東や葱は真白に醤油濃し

銀山のいくつ崩れて天の川 きらきらを吊す聖樹の緑色

桃色は桃の実のいろ甘さうな 余すところ数ふるところ年の暮

~~糸~~瓜忌の糸瓜束子の軽さかな 初鏡わがほほゑみのなしとせず

日本に餡子の幸や小豆煮る 胎の子に初湯加減を聞く夜かな

書初の香に包まれて読始む

~~初~~旅の浜辺に拾ふ桜貝

狼藉や松の内なる寒の入

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

紙懐炉揉み手の中に暖かし

投げ入れし句会の屑や暖炉燃ゆ

山赤く燃えくづほれて炭は灰

洋裁も和裁も廃れ水仙花

とんこめをいことり おぼろげな春の夕

18

色白の軽くやはらか春の雲

冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

狼藉や松の内なる寒の入

毛氈はお日さまの色おひなさま

画用紙のざらりと白し富士に雪

紙懐炉揉み手の中に暖かし

縁側をすたすた歩く帰省かな

岩ひとつ松一本を枯野かな

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

素麺の食後に贅を尽したる

枯草と同じ色して輪ゴムの輪

山赤く燃えくづほれて炭は灰

夕焼に閑散たるや車輛基地

おぶはれて自転車早し暮早し

洋裁も和裁も廃れ水仙花

庭先に母と火遊び夏休

関東や葱は真白に醤油濃し

投げ入れし句会の屑や暖炉燃ゆ

銀山のいくつ崩れて天の川

きらきらを吊す聖樹の緑色

桃色は桃の実のいろ甘さうな

余すところ数ふるところ年の暮

子規の忌の糸瓜束子の軽さかな

とんでもないことの静けさ去年今年

日本に餡子の幸や小豆煮る

初鏡わがほほゑみのなしとせず

その先にありやなしやの穂草の穂

胎の子に初湯加減を聞く夜かな

小春日の既に一句を得し思ひ

書初の香に包まれて読始む

19

色白のやはらかさうな春の雲

冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

狼藉や松の内なる寒の入

毛氈はお日さまの色おひなさま

画用紙のざらりと白し富士に雪

紙懷炉揉み手の中に暖かし

縁側をすたすた歩く帰省かな

岩ひとつ松一本を枯野かな

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

素麺の食後に贅を尽したる

枯草と同じ色して輪ゴムの輪

山赤く燃えくづほれて炭は灰

夕焼に閑散たるや車輛基地

おぶはれて自転車早し暮早し

洋裁も和裁も廃れ水仙花

庭先で母と火遊び夏休

関東や葱は真白に醤油濃し

投げ入れし句会の屑や暖炉燃ゆ

銀山のいくつ崩れて天の川

きらきらを吊す聖樹の緑色

桃色は桃の実のいろ甘さうな

余すところ数ふるところ年の暮

玉蜀黍を食はせて絞る牛の乳

とんでもないことの静けさ去年今年

子規の忌の糸瓜たはしの軽さかな

初鏡わがほほゑみのなしとせず

日本に餡子の幸や小豆煮る

胎の子に初湯加減を聞く夜かな

小春日の既に一句を得し思ひ

書初の香に包まれて読始む

20

色白のやはらかさうな春の雲

冬ざれに買ふ丸首のトレーナー

狼藉や松の内なる寒の入

毛氈はお日さまの色おひなさま

画用紙のざらりと白し富士に雪

紙懐炉揉み手の中に暖かし

縁側をすたすた歩く帰省かな

岩ひとつ松一本を枯野かな

蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

素麺の食後に贅を尽したる

枯草と同じ色して輪ゴムの輪

山赤く燃えくづほれて炭は灰

夕焼に閑散たるや車輛基地

おぶはれて自転車早し暮早し

洋裁も和裁も廃れ水仙花

庭先で母と火遊び夏休

関東や葱を真白に醤油濃し

擲つは句会の屑や暖炉燃ゆ

銀山のいくつ崩れて天の川

きらきらを吊す聖樹の緑色

桃色は桃の実のいろ甘さうな

余すところ数ふるところ年の暮

玉蜀黍を食はせて絞る牛の乳

とんでもないことの静けさ去年今年

子規の忌のへちま束子のこの軽さ

初鏡わがほほゑみのなしとせず

日本に餡子の幸や小豆煮る

胎の子に初湯加減を聞く夜かな

小春日の既に一句を得し思ひ

書初の香に包まれて読始む

21

色白のやはらかさうな春の雲 冬ざれに買ふ丸首のトレーナー 狼藉や松の内なる寒の入

毛氈はお日さまの色おひなさま 画用紙のざらりと白し富士に雪 紙懐炉揉み手の中に暖かし

縁側をすたすた歩く帰省かな 岩ひとつ松一本を枯野かな 蜜柑まだ剥けぬ赤子が弄ぶ

素麺の食後に贅を尽したる 枯草と同じ色して輪ゴムの輪 山赤く燃えくづほれて炭は灰

夕焼に閑散たるや車輛基地 おぶはれて自転車早し暮早し 洋裁も和裁も廃れ水仙花

庭先で母と火遊び夏休 関東や葱を真白に醤油濃し 擲てば句会の反故に暖炉燃ゆ

銀山のいくつ崩れて天の川 きらきらを吊す聖樹の緑色

桃色は桃の実のいろ甘さうな 余すところ数ふるところ年の暮

玉蜀黍を食はせて絞る牛の乳 とんでもないことの静けさ去年今年

子規の忌のへちま東子の軽きかな 初鏡わがほほゑみのなしとせず

日本に餡子の幸や小豆煮る 胎の子に初湯加減を聞く夜かな

小春日の既に一句を得し思ひ 書初の香に包まれて読始む